

『春秋左氏伝』における「情」と感情

橋本昭典

はじめに

「情」の語は、「実情」に始まり、「内情」、「真情」、「感情」、「情緒」、「愛情」、「恋情」、「情欲」などに至る幅の広い意味をもち、その意義特定においてはほとんどが文脈に頼るしかなく、その解釈はまた望文生義としか言いようのないものまでを含む。このような「情」の語のもつ特性は誤読という弊害をもたらすこともあつたが、多義性を許すこの語がもつまさにその本質を見極めることで、誤読の修正以上に見えてくるものがある。筆者はこれまで「情」に関する論考を幾篇か著してきた^①。その成果を踏まえながら、本稿では「春秋左氏伝」という政治の言説を題材として、そこに全十四条見える「情」の用例の原義を検討したい^{②③}。

一、「実」と「情」

『尚書』に「天畏棗忱。民情大可見、小人難保、往盡乃心（天は畏るべし、誠実なものを助ける。「民情」をよく見るべきだ。なぜなら小人は治め難いから。民のところへ往き、おまえの心を尽くせ）」

（周書・康誥^④）とある。このような政治をめぐる言説の中で、人民統治のために理解すべき「実情」といった意味の「情」の例は『左伝』にも見られる。

晉侯在外十九年矣、而果得晉國。險阻艱難、備嘗之矣、民之情偽、盡知之矣。

（晋侯は国外に出て十九年にして、ようやく晋国を手に入れた。あらゆる危機や艱難をことごとく経験しており、民の「情偽」を知り尽くしている）（僖公二十八年）

晋侯の統治能力を称揚する記述において、「民之情偽」という表現が見られる。この「情偽」は、複合語を形成していることから「情」は「偽」の反義であり、「情偽」とは真実と虚構、つまり「虚実」の意味であることがわかる。晋侯は「民之情偽」、すなわち統治すべき「人民の虚実」、人民の真実のすがた、言わば「実相」を知り尽くしていたのである^⑤。

統治者が知るべき「情」は「民情」のみではない。晋の頃公の葬儀に際して、鄭からの参列者が一人しかないことを咎められると、一人参列した鄭の游吉は先例を挙げながら、「先例には手厚い場合と

簡略な場合とがあつて、今は簡略な場合に從わざるをえないのです」と答えた。そしてその弁明のなかでこう述べている。

大國之惠亦慶其加、而不討其乏。明底其情、取備而已、以爲禮也。

〔大國からは、定められた礼よりも手厚く対処した場合はお褒めを頂きましたが、不足した場合にお咎めを頂くことはありませんでした。はつきりと「情」をお示しし、それが充分に備わったものであるとして、礼に適つてゐるとして頂いたのです〕（昭

公三十年）

これは、「礼」というものが、小國が大國に仕え、大國が小國を慈しむことを言うのであり、大國に仕えることはその時々々の命令に從うことに、小國を慈しむことは足りないものを氣に懸けることにある^⑦。という礼原理を前提とした弁論である。大國は、小國の「情」、すなわち「小國の実情」（「国情」）を知らなければならず、その「国情」に適つた対処がここで求められているのである。なお、『尚書』には「民情」という複合語が一例見られたが、『左伝』においてこのような修飾構造をもつ合成語の用例はない。^⑧この一節の「其情」とは「小國の実情」との意味であるが、いまだその修飾構造が熟して「国情」という複合語を形成するには至っていないのである。^⑨『左伝』において、「情」の語は多く單純語として使用されており、修飾構造をもつ場合にはすべて「其」という指示代名詞を伴う。

齊悼公之來也、季康子以其妹妻之。即位而逆之。季魴侯通焉。女言其情、弗敢與也。齊侯怒。

〔齊の悼公が魯に来ていた時に、季康子は自分の妹を娶わせた。即位して迎へに来たが、叔父の季魴侯と密通しており、妹がその「情」を話したので、季康子は渡そうとしなかった。齊侯は怒つた〕（哀公八年）

ここでは魯の季康子の妹が叔父と密通していた「事実」が「其情」として記されている。なお一例を見たい。

宋殺皇瑗。公聞其情、復皇氏之族、使皇緩為右師。

〔宋は皇瑗を殺したが、景公はその「情」を聞いて、皇氏の一族を回復させ、皇緩を右師に任命した〕（哀公十八年）

「其情」とはその内容は具体的には示されないが、疑いが晴れて一族が名誉を回復するに至るその「真相」や「真実」の意味で用いられている。

『左伝』において「情」が指示代名詞と結合する例はいくつか見られる。その場合、「情」の語の意義特定は文脈に頼るより他ない。以上に検討した三例の「其情」は事実、真相、真実といった「実」の意味であることが判断されるが、それはあくまで文脈による理解である。「情偽」はその構造から「情」が「実」の意味であることが明確に知られた。このような例は実際には多くはない。『左伝』では文脈によらずに語義特定が可能であるのはなお次の一例があるのみで

ある。

魯有名而無情、伐之必得志焉。

「魯は大国の名はあつても「情」はない。これを討てば必ず思う通りになります」(哀公八年)

ここでは「有名」との対偶から、「無情」は「無実」の意であることが分かる。この一節は魯の国が有名無実、すなわち名ばかりで実質が伴わないことを言うものである。¹⁰ この「有名無情」(有名無実)と先の「情偽」(虚実)との例は、「情」が「実」と同義において使っている語であることを示す。しかし、「情」が「実」と完全に同質な語であるはずはない。実相、実情、事実、真実とゆるやかに幅は広がるのであるが、さらなる「情」の語の特質を探ってみたい。

二、隠された「実」としての「情」

『左伝』では政治の駆け引きの言説においてしばしば「情」の語が現れる。

対曰、僑如之情、子必聞之矣。

「答えて言った、「叔孫僑如の「情」については、あなたもきくと聞いておられるはずです。」と(成公十六年)

これは、晋の卻犇が、魯の仲孫蔑(孟獻子)と季孫行父(季文子)を捕らえておくことを提案した¹¹ことに對して、それに反對する魯の

子叔声伯(公孫嬰齊)の返答における一節である。そこには、「叔孫僑如(宣伯)が穆姜(成公の母)と通じて、仲孫蔑(孟獻子)と季孫行父(季文子)を排除して、その家乗っ取ろうとしている」という「内情」があり、この一節はこれを「僑如之情」とのみ言うことによって相手に確認を求めるものである。次は「其情」として、憶測される「内情」を指す例である。

穆叔告大夫曰、楚令尹將有大事、子蕩將與焉、助之、匿其情矣。
「穆叔は大夫にこう告げた。「楚の令尹は何か大きな事を起こそうとしている。子蕩はこれに加わり、協力しようとしている。そのためその「情」を隠しているのだ。」と(襄公三十年)

魯の穆叔(叔孫豹)が大夫に、楚の子蕩はその「内情」を隠していると告げたのは、子蕩に王子圍(楚の令尹)の政治はどうであるかと尋ねても、はぐらかして答えないうためであった。¹²そこに隠された「内情」があるとされた根拠としては、楚の国において郈敖が即位した際に、王子圍が令尹となったことに對して、「これはよくない。必ず令尹の王子圍が郈敖にとつて変わる」(襄公二十九年)¹³との評判があったことがある。杜預の「集解」はこれを「王子圍はもとより高貴であるが郈敖は微弱であるために、諸侯はみな王子圍が乱を起こそうとしているのを知っていた。だから穆叔は子蕩にこう尋ねたのだ」とする。しかし、憶測されるその「内情」を實際に確かめることはできなかったのである。また、次のような例がある。

觀起之死也、其子從在蔡、事朝吳、曰、今不封蔡、蔡不封矣、我請試之。以蔡公之命召子干、子皙。及郊、而告之情。強與之盟、入襲蔡。蔡公將食、見之而逃。

〔觀起が殺された時、子の觀從は蔡にいて朝吳に仕えていたが、今、蔡の国を再建しなければ、蔡の国を建てることはできない、私にやらせてもらえないか〕と言うと、蔡公の命によつて子干、子皙を呼び寄せた。郊外に着いたところで、その「情」を告げた。そして強引に盟を結ばせ、蔡を襲撃した。蔡公は食事中であつたが、これを見ると逃げ出した（昭公十三年）

楚の内乱に乗じて謀反を企てた楚の觀從が、蔡公の命と偽つて子干、子皙の二人を亡命先から呼び寄せた。そこでこの二人に打ち明けた「情」とは、杜預の「集解」に「告以蔡公不知謀〔蔡公がこの謀反を知らないことを告げた〕とあるように、実際には蔡公の命ではなかつたという「内情」を指す。次は指示詞を伴わない例である。

范宣子告析文子、曰、吾知子、敢匿情乎。魯人、莒人皆請以車千乘自其鄉入、既許之矣。若入、君必失國、子盍圖之。子家以告公。公恐。

〔范宣子は析文子に告げて言つた、「私はあなたのことをよく知っている。どうして「情」を隠したりしようか。魯と莒の人たちが千乗の兵車でそれぞれの国境から攻め込みたいと請うたので、既にこれを許可してある。もし入ればあなたの君主は必ず国を失うことになる。どうか考え直してほしい」と。析文子

は齊侯に告げると、齊侯は恐れをなした）（襄公十八年）

ここでは親しい間柄の相手に対して、その親しさ故の信頼関係から、相手の君主が考えを変えるほどの価値をもつた「内実」を伝える第一級の「情報」を提供している。結果として「情」は「魯人、莒人」以下の「内実」を指してはいるが、これは「情」の語が発話された時点においてその「内実」を示唆するものではない。その点では「僞如之情」と言われる場合とは異なる。これはあくまで「内実」という一般名詞としての使用であり、「情」が具体的内容を担う語とはなっていない。

以上に見た「情」の例は、政治の駆け引きにおいてやりとりされる一般的には認知度の低い「内情」や「内実」の意味に用いられるものであつた。ただし、「内実」の具体的内容を特定するには指示詞を伴うことが必要とされたのである。

三、「情」と「信」

「情（内実）」は隠されており、それ故に時にそれは一級の情報となり、政治の言説において「情」は駆け引きの材料として現れる。一方で為政者には、見えにくい「情（民情）」や「情（国情）」を理解することが求められる。本来、「情」は隠されることなく明るみにされるのが善しとされたのであつた。

對曰、夫子之家事治、言於晉國無隱情、其祝史陳信於鬼神無愧

辭。

〔答えて言つた、「あの方は家の事をしつかりと治めて、晋の国について語るのにも「情」を隠すことがない。祝、史が「信（ありのまま）」を鬼神に対して述べても恥すべき言辭がない」と〕（襄公二十七年）

これは、楚の屈建（子木）が晋の趙孟に、范文子の人となりについて尋ねた際の返答である。さらにこれを聞いた楚王は「すばらしい、鬼神にも人間にも喜ばれるとは」と感嘆している。この逸話は別の場面でも引かれている。鬼神の祭祀を手厚くしているにもかかわらず、齊の景公の病が癒えないことの責を祝、史の官に移し、この二名の祭祀の官を殺そうとしたことに反対する晏嬰が、祝、史の官に罪のないことを景公に説くための弁論の中にこうある。¹⁸

晏子曰、日宋之盟、屈建問范會之德於趙武。趙武曰、夫子之家事治、言於晉國、竭情無私。其祝、史祭祀、陳信不愧。其家事無猜、其祝、史不祈。

〔晏子は言つた、「先ごろの宋の盟の際に、屈建は趙武に范文子の人柄について尋ねると、趙武はこう言いました。『あの方は家の事をしつかりと治めて、晋の国について語るのにも「情」を尽くして私心がない。祝と史は祭祀の際に「信（ありのまま）」を鬼神に対して述べても恥すべきことがない。家にも疑わしいことがないので、祝と史は祈りを込めなくてもよい』と〕（昭公二十年）

晏子はこの逸話を引いて、「若有德之君、外内不廢、上下無怨、動無違事、其祝、史薦信、無愧心矣（有徳の君主というものは、内外において混乱がなく、上下において恨みがなく、行動を誤ることがなく、祝、史の官が「信（ありのまま）」を述べても、心に恥ずるところがない」と景公を諭す。続けて、国が鬼神の祝福を享けるのは、「其言忠信於鬼神（「忠信（ありのまま）」を鬼神に述べる）」ことによるとされる。反対に、放縱な君主の場合は、「其祝、史薦信、是言罪也（祝、史の官が「信（ありのまま）」を鬼神に告げれば、それは自らの君主の罪を暴くことになる）」であるし、「其蓋失數美、是矯誣也（過失を覆い隠し美化するのは、虚偽を告げることになる）」のである。そこで、「進退無辭、則虛以求媚（どのように報告することもできず、虚言をもつて鬼神に媚びる）」しかなく、「是以鬼神不饗其國以禍之、祝、史與焉（それ故にその国は祝福されず災いが降りかかり、それは祝、史の官にも及ぶ）」のである。このように、鬼神への祭文においては、何より「信（ありのまま）」を告げることが大切だとされる。では何を告げるのか。それは「家事」や「国事」である。よつて、そのためには、趙武の「言於晉國、竭情無私」、「言於晉國無隱情」という態度が称揚されているように、「家事」や「国事」の「内実」をことごとく公にすることが可能でなければならぬ。²⁰「情」は隠されることなく、私心なく、「信」や「忠信」のままに、「言辭」となつて鬼神に報告されるべきなのである。

一方、「情」を尽くしても、そこに私心がある場合の記述もある。魯の季孫を晋からうまく魯へ帰らせようとする策略の中で、晋の叔

魚は言う。

叔魚見季孫、曰、昔鮒也得罪於晉君、自歸於魯君、微武子之賜、不至於今。雖獲歸骨於晉、猶子則肉之、敢不盡情。歸子而不歸鮒也聞諸吏、將為子除館於西河、其若之何。且泣。平子懼、先歸。

〔叔魚は季孫に会つて、言つた、「昔、私は晉君に罪を得て、魯君に身を寄せたことがあります。（あなたの祖父の）季武子のお助けがなければ、今生きていられることはなかったでしょう。骨は晉に帰ることができたとしても、あなたのおかげで肉とともに帰つてこられたのです。どうして「情」を尽くさないことがありましょうか。あなたを帰すことになりましたのにお帰りにならないため、私が役人から聞いたところによると、あなたのために西の黄河のあたりに（幽閉のための）宿を用意したとのことです。どうなさいますか」と。そして涙を流した。季孫は恐れて、先に帰つた〕（昭公十三年）

これは、「且泣」を杜預「集解」が「泣以信其言」と釈するように、一連の虚偽の言動である。よつて「盡情」という行為からもたらされる具体内容もまた虚偽のものとなる。従来、この「盡情」は「あなたのために何でもする」といったような意味に解されてきた²⁾。これは「情」を「真情」や「誠実」の意味に取ることによるものである。しかしながら、ここではこの「敢不盡情」と類似する、先に検討した「敢匿情乎」（襄公十八年）の句を想起したい。この襄公十

八年の例では、「敢匿情乎」の言葉の直後に第一級の情報がもたらされていた。そこでは「情」は「内実」の意であつた。この一節も同様である。「敢不盡情」の言葉の直後に、幽閉の計画があることが明かされている（ただし、これは虚偽の情報であるが）。また、本節で検討した范武子の逸話では、同一故事の「内実をありのままに述べる」という同意の内容が、一方は「無隱情」（襄公二十七年）、一方は「竭情」（昭公二十年）と表現されていた。以上から、「敢不盡情」もまた「敢匿情乎」と同意のことを言うことみなしてよい。とするなら、この「情」は「真情」や「誠実」としてではなく、やはりまた「内実」として、「どうして内実を打ち明けないことがあるうか」という、情報を提供する言説として解釈すべきとなる。

四、「忠」と「情」

『左伝』において「真情」（まごころ）と解釈される「情」がなお一例ある。

齊師伐我。公將戰。曹劌請見。……乃入見。問何以戰。公曰、衣食所安、弗敢專也、必以分人。對曰、小惠未遍、民弗從也。公曰、犧牲玉帛、弗敢加也、必以信。對曰、小信未孚、神弗福也。公曰、小大之獄、雖不能察、必以情。對曰、忠之屬也、可以一戰。戰、則請從。

〔齊の軍が我が国を攻めて来た。公が戦おうとすると、曹劌が

謁見を願ひ出た。…そこで謁見して、「何を根拠にして戦われるのですか」と尋ねた。公は言った、「暖かい着物や旨い料理は独り占めせず、必ず人に分け与えている」と。答えて言った、「そのような小さな施しでは遍く行き渡りません。民は従わないでしょう」と。公が言った、「犠牲や玉帛には余分なものを加えず、必ず事実を述べている」と。答えて言った、「そのような小さな事実の実践では、神は祝福しないでしょう」と。公が言った、「大小さまざまな訴訟については、真相を究めることはできなくても、必ず「情」をもってしている」と。答えて言った、「忠実に仕事をしておられる。戦ってもよいでしょう。戦う時は従軍致します」と（莊公十年）

魯公の戦う資格を求めたこの一連の問答において、公の言う恵みは「小恵」とされ、公の言う「信」もまた「小信」とされ、いずれも不十分とされるが、公の訴訟への態度が「忠」として評価される。そして訴訟に臨む態度であるこの「情」は、杜預の「集解」が「必尽己情」とすることから、「おのれの真心を尽くす」と解される場合がある。しかし、ここでは「必以情」とする態度が「忠」とされていることに留意して解釈する必要がある。

杜預「集解」はこの「忠」を、「上思利民、忠也」を援引して解釈している。これは『左伝』桓公六年の「所謂道、忠於民而信於神也。上思利民、忠也。祝史正辭、信也（道というのは、民に忠にして神に信であることである。上の者が民の利益を考えることが忠で

あり、祝、史が正しく祭文を作ることが信である）」によるものである。孔穎達の「正義」はこれを敷衍して、「言以情審察、不要使之有枉、則是思欲利民、故為忠之屬也」と言う。この意味は、「情」（杜預に従うなら「まごころ」）でもって審判に当たり、冤罪のないようにすることは、民に利益をもたらそうと思つてのことであり、故にその行いは「忠」とすることができると言うことである。

『左伝』における「忠」は、「公家之利、知無不為、忠也（公室のために何でも行なうのは、忠である）」（僖公九年）や「君薨、不忘增其名。將死、不忘衛社稷、可不謂忠乎（君主が崩すると、よき名を送ることを忘れず、自分が死ぬ時は、国を守ることを忘れないのは、忠と言ふべきだ）」（襄公十四年）とあるような、「忠君」の「忠」の意味に使われるのが一般的である。「上思利民」とは利益の向かう方向がちやうど反対となるものの、いずれも相手に利益をもたらそうとする思いをその内容とする。では、これが「忠」の意味であらうか。これには『左伝』に見られる次の例が参考になる。

不背本、仁也。不忘舊、信也。無私、忠也。尊君、敏也。

（本に背かないのは、仁である。旧を忘れないのは、信である。私がないのは、忠である。君を尊ぶのは、敏である。）（成公九年）
以私害公、非忠也。

（私心によつて公益を損なうのは、忠ではない）（文公六年）

以上の二例における「忠」はともに「無私」、「私心のないこと」を言う。つまり「公正」なことを言うのである。先の「上思利民、忠

也（桓公六年）の「忠」もまた、これに続く「祝史正辭、信也」が公正さを評価するものでもあることから、同様に、私心を捨て、公益を実現させるという公正さを求めた言説と考えることができる。とすると、「忠」とされた「必以情」という訴訟に臨む態度もまた、その公正さが評価されたと考えるべきではないか。では、公正な審判に必要なものとは果たして「まごころ」であろうか。そうではない。公正な審判に必要な「情」とは、やはりこれまで検討してきたのと同じく「実相」、「実情」、「真実」といった意味であるべきであろう。公は訴訟に臨んではその大小を問わず、常に「事実」を把握することを何より重んじているのである²³。

五、「情」と感情

『左伝』における「情」の用例は全十四条である。本稿ではここまでの十三条について検討を行なった。その結果、従来「真情」、「まごころ」と解釈されてきたものは誤りであり、すべては「実」を基本とした「実相」、「事実」、「内実」、「実情」といった意味であることが確認できた。では以下に、残る一例について検討を行ないたい。

襄仲欲勿哭。惠伯曰、喪、親之終也。雖不能始、善終可也。史佚有言曰、兄弟致美。救乏、賀善、弔災、祭敬、喪哀、情雖不同、母絶其愛、親之道也。子無失道、何怨於人。襄仲說。帥兄弟以哭之。

〔襄仲は（妻を取られたことを恨んで）哭を行なおうとしなかった。惠伯は言った、「喪は近親者の最後である。始まりを仲睦まじくすることはできなくても、終わりが良ければよい。史佚に次のような言葉がある。『兄弟は美を尽くし、困ったときは助け、善きことを祝い、災いを弔い、祭りには敬い、喪には哀しむ。』情は異なると言っても、その愛を失くしてはいけない。これが近親者の道である』と。あなたはこの道を失ってはいけないのに、どうして人を怨むのですか。』と。襄仲は納得し、兄弟とともに哭を行なった』（文公十五年）

ここでの「情」は「感情」の意味に取られ、「情雖不同」とは「感情は異なるけれども」と解釈される²⁴。それは孔穎達「正義」の次の解釈にも明らかである。

情雖不同、謂内相怨恨。情雖不能和同、当無絶其愛、是相親之道也。

〔「情雖不同」とは、内に恨みの感情をもっていることを言うのである。情を統一させることはできないけれども、その愛を失ってはいけない。これが近親者の道である〕

孔穎達はこのように、表面上は死者を悼む悲しみの感情を表しながら内に恨みの感情を抱いている状態を「情雖不同」と解釈したのである。これによって「感情は異なっているが」その両感情の根底には愛がなければならないと解するのである。しかし、この一節は

「哀」と「怨」という二つの感情をもちながらさらに「愛」という感情をもつという複雑なことを述べたものとは解しがたい。

試みに、本稿で行なったこれまでの検討結果を踏まえて、この箇所の「情」を「実」の意味において捉えてみるなら、その解釈はこうなる。まず、「情雖不同」とされる「不同」とは「感情」の不同を言うのではなく、「致美、救乏、賀善、弔災、祭敬、喪哀」というこれら諸徳目の不同を指す。つまり、「救乏、賀善、弔災、祭敬、喪哀」と列挙されるそれぞれの善行の「内実」はそれぞれ異なるけれども、これらの善行に共通してあるのは近親者への愛である、だからどのような状況であつてもその愛を失つてはいけない、とする解釈が可能なのである。

ではここで視点を變えて、『左伝』の感情表現について検討してみたい。筆者は拙稿「感情概念の誕生と言語化」において、中国古代では、「感情」という概念が熟するのは「喜怒」「哀樂」などの概念抽出型反義複合語の形成以後である点を指摘し、先秦の文獻においては、『論語』や『孟子』にはそれが見られず、『莊子』及びそれ以降の文獻には多く見られることを明らかにした。さらに、「喜怒哀樂」といった概念抽出型反義複合語によって抽象される概念が固定した名称をもつのは、それが確認できる『礼記』の「何謂人情。喜怒哀懼愛惡欲七者、弗學而能」（礼運篇）や『荀子』の「性之好惡喜怒哀樂謂之情」（正名篇）を待たなければならず、しかしながらそれも「人の情」、「性の…」とあるように、この両記述においてもなお、喜怒哀樂の感情そのものが「情」と名づけられているのではなく、「情」

が直ちに「感情」の意味をもつようになるのはおおむね漢代になつてからであると結論した。

では『左伝』においてはどうかであろうか。『左伝』には、喜怒哀樂という概念抽出型反義複合語は見られる。喜怒は「喜怒以類者鮮（喜怒を適度にするものは少ない）」、「君子之喜怒」（宣公十七年）の二例があり、哀樂は「哀樂失時」（莊公二十年）、「哀樂之事」（昭公一年）など六例があり、今日言うところの感情という概念は十分に成熟していたと言える。次に、その喜怒、哀樂という反義複合語の背景に意識されたいわゆる感情という概念は『左伝』において既に名称を獲得していたであろうか。次の記述を見たい。

民有好惡喜怒哀樂、生於六氣、是故審則宜類、以制六志。

〔民の好惡喜怒哀樂は、六氣から生じる。そのため則るべきものを明らかにしてそれぞれに應じて、この六志を制御しなければならぬ〕（昭公二十五年）

感情の制御の必要性を説くこの記述において、好惡喜怒哀樂は「六情」ではなく、「六志」と呼ばれている。このことから、少なくとも『左伝』の時代において、喜怒哀樂などのいわゆる感情という概念は必ずしも「情」の語と結びつくものではなかった、喜怒哀樂は「志」とも呼ぶうるものでもあったということが言えるのである。

この事実と、本稿において『左伝』の「情」が「実」の意味を出ないことが明らかになったことをあわせ考えると、最後のこの一例の「情」が「感情」を意味しているとは考えがたくなる。やはり

本稿において提示した「内実」の意味に解するのが妥当であると考えるのである。

おわりに

本稿では『左伝』における「情」の用例全十四条を検討した。その結果、『左伝』の「情」について、二例ある「情偽」、「有名無情」の合成語から「情」が「実」と同義に使いうることを、「実」を基盤としてより広く「実相」、「真実」、「内実」の意味に使われること、それらは指示詞を伴うと知られるべき対象の実情、打ち明けられるべき具体的内容を指すこと、指示詞を伴わない場合はこれから明るみにされるべき具体内容が用意されていること、ありのままを意味する「信」や公正を意味する「忠」と近い語であること（具体的に「情」は「信（ありのままに）」に語られるべきであり、「情」は「忠（公正）」に見極められるべきであること）、「真情」の意味は見出されないこと、いまだ「感情」の意味を有さないこと（今日言うところの感情の概念が「情」の語とは結びつかないこと）が明らかになった。

注

(1) 拙稿「感情概念の誕生と言語化——中国古代の「情」の地平——」（『奈良教育大学国文』第二十八号、二〇〇五年）、拙稿「郭店楚簡『性自命出』

における「情」について」（『中国研究集刊』第三十六号、二〇〇四年）、拙稿「『莊子』における「真」と「性」と「情」——一般語義と思想の言語——」（『中国思想における身体・自然・信仰』東方書店、二〇〇四年）。

(2) 『春秋左氏伝』（以下「左伝」と称す）の原文は阮元校勘十三經注疏本（台湾芸文印書館印行）に従った。解釈は杜預『春秋経伝集解』、孔穎達『春秋左氏伝正義』を始め、洪亮吉『春秋左伝詁』（中華書局）、楊伯俊『春秋左伝注』（中華書局）をひとまず参考にした。日本語訳としては、竹内照夫『春秋左氏伝』（平凡社、一九五八年）、小倉芳彦『春秋左氏伝』（汲古書院、二〇〇五年）を主に参考にした。『左伝』の成立年代、成立状況についてはこれまでの膨大な研究史を整理した趙伯雄『春秋学史』（山東教育出版社、二〇〇四年）をひとまず参考にし、あわせて平勢隆朗『春秋』と『左伝』（中央公論社、二〇〇三年）を参考にして、その成立年代をおおむね戦国中期として本論を展開する。

(3) 『左伝』の「情」の字を検討したものに、李天虹『《性自命出》研究』（湖北教育出版社、二〇〇三年）第三章『性自命出』与伝世先秦文献「情」字解詁がある。

(4) この「情」については、孔穎達の「正義」が「人情大可見、以小人難安」とするのを参考。なお、『尚書』において「情」はこの一例のみである。

(5) 前掲李天虹『《性自命出》研究』はこの「情」を「真心」「誠」として解釈するが（三十五頁）、複合語の構成原理を理解せず、望文生義によって誤説を生む典型的な例であると言えるであろう。

(6) 原文は「舊有豐有省、不知所從。從其豐、則寡君幼弱、是以不共。從其省、則吉在此矣」。

(7) 原文は「禮也者、小事大、大字小之謂。事大在共其時命、字小在恤其所無」。

(8) 孔穎達「正義」に、「明知鄭國致其情実、取充備而已」とある。

(9) なお、『民情』の語は先秦古文獻において常用の言葉ではない。その使用例はこの『尚書』以外には、『周礼』秋官・司寇に「以五聲聽獄訟、

求民情」とあり、同じく『周礼』秋官・司寇に「以此三法者求民情」とあり、『礼記』緇衣に「民情不貳」とある合計四例のみだけで、その他の先秦諸子の著作にはその用例が見られないものである。

⑩「国情」という合成語の例は古文獻には見られず、『戦国策』秦一に「陳軫為王臣、常以國情輪楚」とあるのが古い例である。

⑪杜預「集解」に「有大国名、無情実」とあるのを参考。

⑫原文は「卻鞮曰、荀去仲孫蔑、而止季孫行父、吾與子國、親於公室」。

⑬原文は「宣伯通於穆姜、欲去季、孟而取其室」。

⑭この解釈は前掲楊伯俊「春秋左伝注」に従う。

⑮原文は「穆叔問王子之為政何如。對曰、吾儕小人食而聽事、猶懼不給命、而不免於災、焉與知政。固囑、不告。なお、原文「王子之為政何如」は、『經典釈文』では「王子國之為政何如」となっており、阮元の「校勘記」には「案石經此行重刻、疑初刊有國字」とあり、王叔岷『左伝校考』（中央研究院文哲研究所、一九九八年）は「或有國字乃據杜注所補邪」と言うのを参考。

⑯原文は「楚郢敖即位、王子圍為令尹。鄭行人子羽曰、是謂不宜、必代之昌。松柏之下、其草不殖」。

⑰原文は「子圍素貴、郢敖微弱、諸侯皆知其將為亂、故穆叔問之」。

⑱原文は「王曰、尚矣哉、能欲神、人。なおこの解釈は、俞樾『群經平議』が「一歆字兼神人、而言杜解未得其旨」とするのに従う。

⑲ここまでの原文は「齊侯疥、遂虐、期而不瘳。諸侯之實問疾者多在。梁丘據與裔數言於公曰、吾事鬼神豐、於先君有加矣。今君疾病、為諸侯憂、是祝、史之罪也。諸侯不知、其謂我不敬、君盍誅於祝固、史闔以辭寶。公說、告晏子」。

⑳なお、この同意の「無隱情」（襄公二十七年）と「竭情」（昭公二十年）の二例について、前掲李天虹『《性自命出》研究』は、なんと前者を「情実之義」とし、後者を「真心」「誠」としている（三十四～三十五頁）。恐らくは「竭情」の「竭」の字義に影響された、初歩的な誤りだと言つてよいであらう。

㉑前掲小倉訳は「どんな努力も惜みません」とし、前掲竹内訳は「どうして心の底からあなたのためを思わずにおられまじうか」とする。前掲李天虹『《性自命出》研究』もまた「真心」「誠」とする。

㉒前掲李天虹『《性自命出》研究』はこの杜預「集解」を引いて、「真心」とする。前掲竹内訳は「必ずまごころで当たつてゐる」とする。

㉓小倉芳彦『春秋左氏伝』がこれを「実情把握につとめておる」とするのを参考。

㉔前掲竹内訳は「感情の行違はあらうとも」とし、前掲小倉訳は、「感情に行き違ひがあつても」とする。前掲李天虹『《性自命出》研究』は「真心」「誠」とする。

㉕「六情」、「五情」という語は先秦諸文獻には見られないものである。

㉖感情表現の「喜」、「怒」という単純語から「喜楽」という同義複合語へ、そこから「喜怒哀喜」と怒り」という両義並存型反義複合語をへて、「喜怒哀」という感情」という概念抽出型反義複合語の誕生へ、さらに抽象されたその概念が名称を獲得するまでの過程において、おおよそその成書が戦国中期とされる『左伝』は反義複合語の成熟からその概念が「情」という語を獲得する過渡期にあると言える。よつてこの点からも、『左伝』の当時の「情」は、「実」に根ざした意味のうちにあつて、「感情」を意味し得ないことが分かる。詳しくは前掲拙稿「感情概念の誕生と言語化」を参考。

（本学助教授）